

## ■ 概況

7/1~7/7のNYMEX・WTI先物市場は、72.20~75.23ドルの範囲で推移した。

7月8日は、1日遅れで発表の米国エネルギー情報局(EIA)の前週末石油在庫報告で、原油・ガソリンとも市場予想を上回る取り崩れであったことから、先行き需要の旺盛さが意識され、4営業日ぶりに反発した。他方、事実上の決裂となったOPECプラスの閣僚協議については、先行き不透明感が強く、様子眺めの雰囲気であった。8月限の終値は前日比0.74ドル高の72.94ドル。

週末9日は、米国のドライブシーズン本格化でガソリン需要が高まっており、先行き需要の増加期待から、大幅続伸した。米国株価の上昇も支援要因となった。なお、米国内の稼働中の石油掘削装置は前週末比2基増の378基。8月限の終値は前日比1.62ドル高の74.56ドル。

週明け12日は、新型コロナ変異種の感染再拡大による経済活動への悪影響が懸念され、3営業日ぶりに反落した。OPECプラス協議の決裂についても、協調体制の崩れの側面が意識され、値下がり要因となった。8月限の終値は前日比0.46ドル安の74.10ドル。

13日は、翌日発表予定のEIA米国在庫報告で、原油在庫の大幅取り崩しが予想されるとして大幅反発、75ドル台を回復した。また、同日発表の国際エネルギー機関(IEA)の7月石油市場報告では、OPECプラス協議の決裂について、石油需給ひっ迫の可能性を懸念する一方、各国が市場シェア争いに走り出すリスクもあると指摘した。8月限の終値は前日比1.15ドル高の75.25ドル。

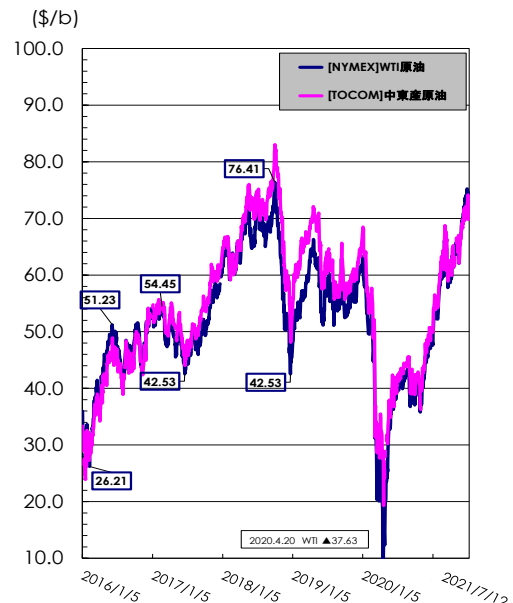
14日は、5日に決裂したOPECプラスの閣僚協議再開の報道を受け、減産緩和に動くとの観測から、反落した。また、米国エネルギー情報局(EIA)の米国石油在庫統計は、原油は減少したものの、ガソリンがドライブシーズンにもかかわらず、市場予想に反して増加したことも値下がり要因となった。8月限の終値は前日比2.12ドル安の73.13ドル。

アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(9月渡し)は、7月1日~7日の間72.70~75.60ドルの範囲で推移した。7月8日71.20ドル、9日72.50ドル、12日73.70ドル、13日73.80ドル、14日74.80ドルと推移した。

為替は7月1日~7日の間110.46~111.66円の範囲で推移した。7月8日110.58円、9日109.92円、12日110.17円、13日110.40円、14日110.67円で推移した。

そのような中で、7月12日時点の小売価格は、ガソリンが前週(7月5日)比0.5円の値上がり、軽油も同0.5円の値上がり、灯油は同10円の値上がり(18%ベース)だった。ガソリンは6週連続の値上がり、軽油も6週連続の値上がり、灯油は32週連続の値上がりだった。この週(7月第2週)の原油コストは値下がり、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに、前週比0.5~1.0円の引き下げとなった模様。

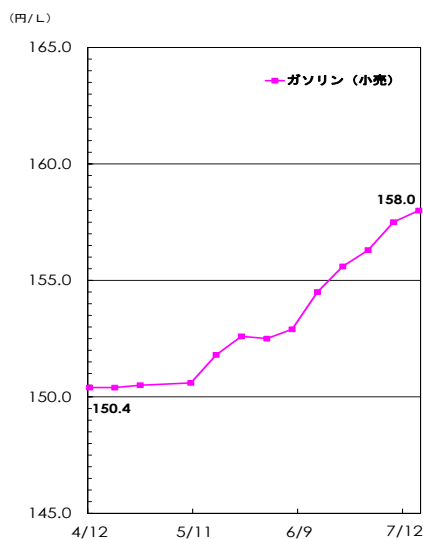
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	7/4 ~ 7/10	2,321 ▼ -46	▲ -
	トッパー稼働率 (%)	"	60.3 ▼ -1.2	▲ -
	原油在庫量 (千kl)	7/10	11,774 ▲ 211	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	7/12	72.51 ▼ -0.59	▲ 30.0
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	7/12	74.10 ▲ 0.73	▲ 34.0
	原油CIF単価 (\$/bbl)	6月中旬	69.56 ▲ 1.82	▲ 45.01
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	47,955 ▲ 1,457	▲ 31,311
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	109.59 ▼ -0.45	▼ -1.83
	外国為替TTSレート (¥/\$)	7/12	111.17 ▲ 0.99	▼ -3.33



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/4 ~ 7/10	721 ▼ -90	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	828 ▼ -26	▲ -	
	輸出	"	30 ▼ -71	▲ -	
	在庫	7/10	2,029 ▼ -137	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/6 ~ 7/12	68.6 ▲ 0.8	▲ 26.8	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/6 ~ 7/12	67.6 ▲ 1.8	▲ 27.4
		(TOCOM/中部)	7/12	67.2 ▼ -0.3	▲ 26.7
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/12	158.0 ▲ 0.5	▲ 26.2	

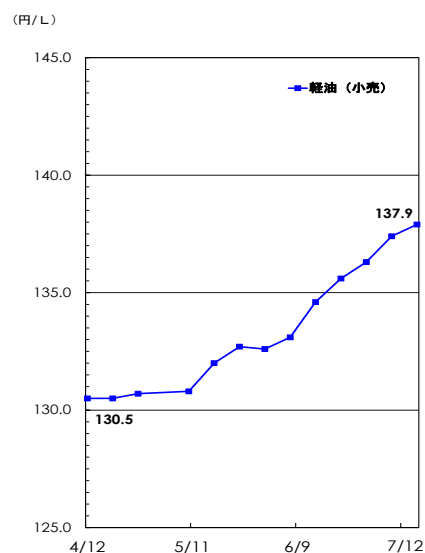
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

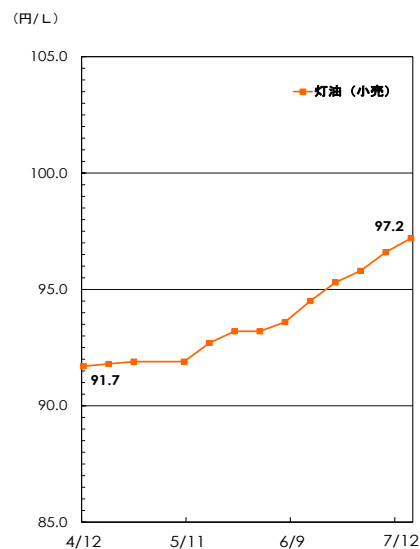
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/4 ~ 7/10	632 ▼ -33	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	554 ▼ -52	▼ -	
	輸出	"	0 ▼ -98	▼ -	
	在庫	7/10	1,789 ▲ 77	▲ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/6 ~ 7/12	69.9 ▲ 0.3	▲ 26.3	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/6 ~ 7/12	69.2 → 0.0	▲ 22.3
		(TOCOM/中部)	7/12	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/12	137.9 ▲ 0.5	▲ 25.5	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	7/4 ~ 7/10	86 ▼ -29	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	93 ▼ -5	▲ -	
	輸出	"	0 ▼ -22	▼ -	
	在庫	7/10	1,748 ▼ -8	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	7/6 ~ 7/12	69.6 ▲ 0.6	▲ 26.3	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	7/6 ~ 7/12	64.7 → 0.0	▲ 23.9
		(TOCOM/中部)	7/12	67.1 ▼ -0.4	▲ 24.1
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/12	97.2 ▲ 0.6	▲ 18.6	



■ 関連情報

1 海外/原油

7月14日のNYMEXのWTI先物原油は反落した。OPECプラスの閣僚協議は、5日に事実上決裂したが、対立していたサウジアラビアとアラブ首長国連邦(UAE)が、8月以降の減産緩和に関する協議に合意したことから、今週中にも協議が再開されることになり、OPECプラスは段階的増産に動くと思われる。さらに、同日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の米国石油在庫統計で、原油在庫は市場予想通り減少(790万バレル減)したものの、ガソリンは市場予想に反し増加(100万バレル増)したことから、夏のドライブシーズンにもかかわらず、需要が弱くとして、売られた。8月限の終値は前日比

2.12ドル安の73.13ドル、9月限の終値は2.05ドル安の72.64ドル。

EIAによると、7月12日時点のガソリンの小売価格は、前週比1.1セント値上がりの1ガロン3.133ドル(91.9円/㍗)、ディーゼルは同0.7セント値上がりの3.338ドル(97.9円/㍗)となった。ガソリンは3週連続の値上がり、ディーゼルは11週連続の値上がりとなった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2021年7月4日～7月10日に休止したトッパー能力は90.0万バレル/日で、前週に対して9.0万バレル/日増加した(全処理能力は345.8万バレル/日)。

原油処理量は232.1万klと、前週に比べ4.6万kl減少。前年に対しては1.7万klの増加。トッパー稼働率は60.3%と前週に対して1.2ポイントの減少、前年に対しては1.5ポイントの増加となった。

生産は前週に比べて全ての油種で減産となった。ガソリン/11.1%減、ジェット/8.9%減、灯油/24.9%減、軽油/5.0%減、A重油/16.8%減、C重油/25.6%減。今週のC重油の輸入は0.3万kl(前週比3.4万kl減)。軽油の輸出は0.0万kl(前週比9.8万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は前週比でA重油が増加し、その他の油種で減少した。前年比ではガソリン、ジェット、灯油、C重油が増加し、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は82.8万kl(対前週3.1%減)と2週振りで減少した。ジェット4.7万kl(対前週34.8%減)、灯油9.3万kl(対前週4.9%減)、軽油55.4万kl(対前週8.6%減)、A重油15.9万kl(対前週3.1%増)、C重油16.2万kl(対前週13.7%減)。

(単位:千kl)

	今週 (7/4 ~ 7/10)	前週 (6/27 ~ 7/3)	前週比
ガソリン	828	854	▼ -26 (-3%)
ジェット燃料	47	71	▼ -24 (-34%)
灯油	93	98	▼ -5 (-5%)
軽油	554	606	▼ -52 (-9%)
A重油	159	154	▲ 5 (3%)
C重油	162	188	▼ -26 (-14%)
合計	1,843	1,971	▼ -128 (-6%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

7月10日時点の在庫は、ジェット、軽油で積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。前年に対してはガソリン、軽油が増加し、その他の油種で減少となった。

ガソリンは202.9万kl、前週差13.7万kl減。前年に対しては36.4万kl多い。

灯油は174.8万kl、前週差0.8万kl減。前年に対しては3.9万kl少ない。

軽油は178.9万kl、前週差7.7万kl増。前年に対しては20.2万kl多い。

A重油は73.3万kl、前週差1.6万kl減。前年に対しては2.4万kl少ない。

C重油は186.8万kl、前週差3.0万kl減。前年に対しては5.5万kl少ない。

(単位:千kl)

	今週 (7/10)	前週 (7/3)	前週比
ガソリン	2,029	2,166	▼ -137 (-6%)
ジェット燃料	769	732	▲ 37 (5%)
灯油	1,748	1,756	▼ -8 (-0%)
軽油	1,789	1,712	▲ 77 (4%)
A重油	733	749	▼ -16 (-2%)
C重油	1,868	1,898	▼ -30 (-2%)
合計	8,936	9,013	▼ -77 (-0.9%)

### 3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

7月6日～12日の指標原油価格は前週(6月29日～7月5日)比で値下がりし、為替レートも円高で、円建ての原油コストは値下がりしたと見られる。

これを受けて、次週(7/15～7/21)の大手元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、前週比0.5～1.0円の値下げとなった模様。

### 3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

7月6日～12日の製品スポット市況は、6月29日～7月5日平均と比べ、灯油と軽油の先物取引の横ばいを除いて、他の油種・取引で、値上がりした。

直近(7/6～7/12)の陸上スポット価格平均値(千葉・川崎・中京・阪神の4地区の陸上ラック価格)は、前週比で、ガソリンは0.8円の値上がり、灯油は0.6円の値上がり、軽油は0.3円の値上がりだった。直近週(7/6～7/12)において、ガソリンは122円台で値上がり後ほぼ横ばい、灯油は69円台で値上がり後値下がり、軽油は69～70円台でわずかに値上がり後横ばいで推移した。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、直近週(7/6～7/12)に、前週比で、ガソリンは0.9円の値上がり、灯油は1.1円の値上がり、軽油は0.7円の値上がりだった。海上スポット価格は、同期間(7/6～7/12)に、ガソリンは123円台で値上がり、灯油は63～70円台で大きく値上がり後急落し回復、軽油は71円台で値上がりして推移した。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは1.8円の値上がり、灯油は横ばい、軽油も横ばいだった。先物価格は、同期間(7/6～7/12)に、ガソリン120～122円台で値下がり後大きく値上がり、灯油63～66円台で大きく値下がり後値上がり、軽油68～70円台で大きく値下がり後値上がりして推移した。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー 4地区平均]	今週 (7/6～7/12)	前週 (6/29～7/5)	前週比
	レギュラー	68.6	67.8
灯油	69.6	69.0	▲ 0.6
軽油	69.9	69.6	▲ 0.3

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値 [平均]]	今週 (7/6～7/12)	前週 (6/29～7/5)	前週比
	レギュラー	67.6	65.8
灯油	64.7	64.7	→ 0.0
軽油	69.2	69.2	→ 0.0

※上記価格は税抜き価格

参考値 (7/6～7/12実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 0.8	▲ 1.8	▲ 1.3
灯油	▲ 0.6	→ 0.0	▲ 0.3
軽油	▲ 0.3	→ 0.0	▲ 0.2
A重油	▲ 0.6		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

### 4 国内/製品小売価格

7月12日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週(7月5日)比0.5円高の158.0円、軽油も同0.5円高の137.9円、灯油は18 $\frac{1}{2}$ ペースで同10円高の1,749円(1 $\frac{1}{2}$ ペースでは同0.6円高の97.2円)。ガソリンは6週連続の値上がり、軽油も6週連続の値上がり、灯油は32週連続の値上がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは38都道府県、横ばいは2県、値下がり7県だった。全国最安値は150.6円の岡山県(同0.1円高)、その次に安かったのは152.3円の徳島県(同0.7円高)、他方、最高値は167.5円の長崎県(同0.6円高)だった。最も値上がりしたのは同1.8円高

の沖縄県(163.6円)で、横ばいは山口県と宮城県の2県、最も値下がりしたのは同0.4円安の佐賀県(157.8円)だった。

今週(7月6日～12日)は、指標原油価格は値下がりし、為替レートも円高で、円建ての原油コストは値下がりしたと見られる。次週(7月15日～21日)適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、前週比0.5～1.0円の値下げとなった模様。次回調査時(7月19日)のガソリンの小売価格は小幅な値下がりが見込まれる。

(単位: 円/%)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (7/12)	前週 (7/5)	前週比	直近高値
レギュラー	158.0	157.5	▲ 0.5	08/8/4 185.1
灯油	97.2	96.6	▲ 0.6	08/8/11 132.1
軽油	137.9	137.4	▲ 0.5	08/8/4 167.4

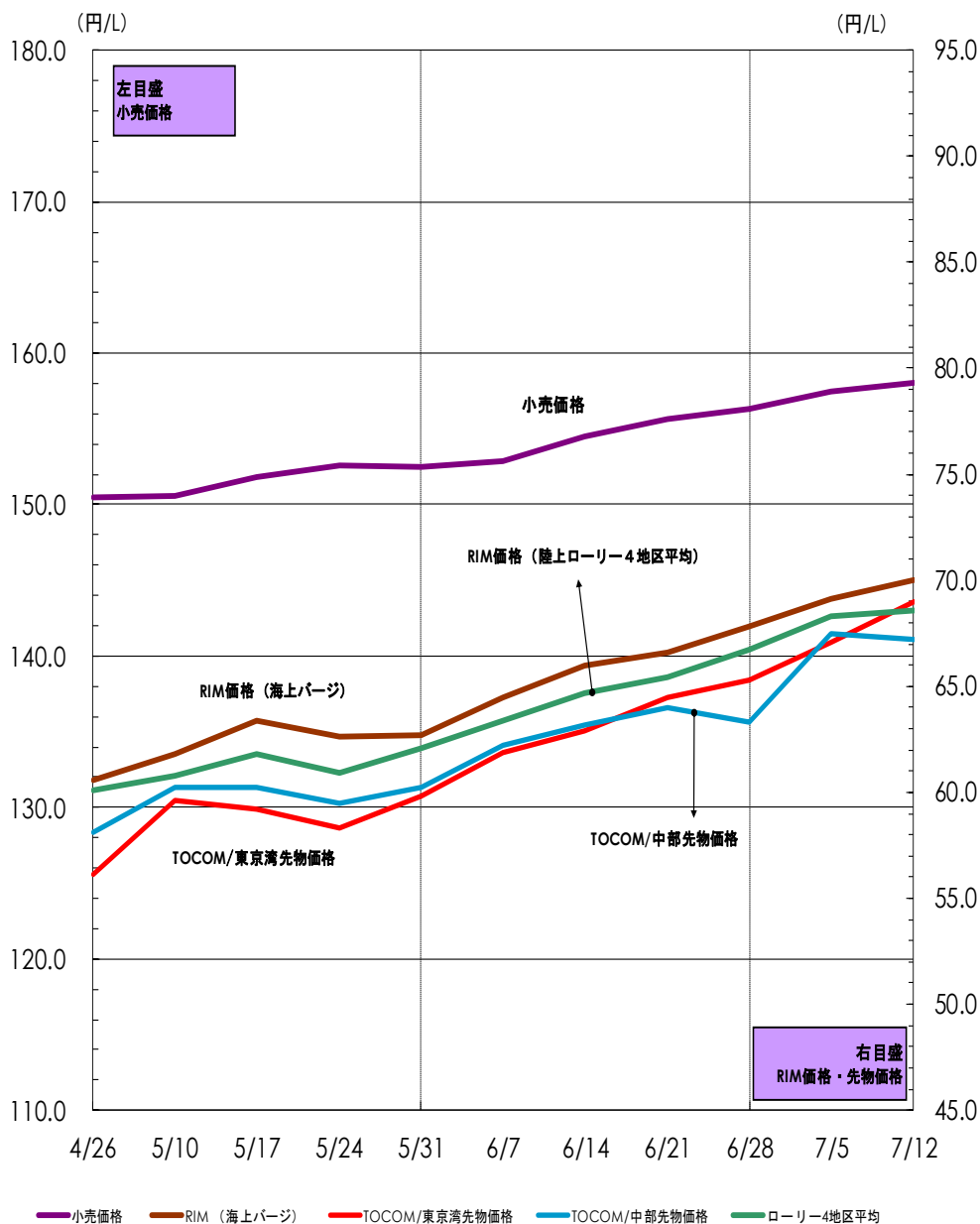
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

# ガソリン価格推移

(2021/4/26 ~ 2021/7/12)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格  
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

## ■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。  
次回(2021第16号)の公表は、連休のため7/26(月)中になります。

「セルフSS出店状況」(令和2年3月末現在)は、8月26日(水)14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

### 本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。  
当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。  
また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

### 「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。  
当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

### 本レポート掲載データの出所について

#### ①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。  
「出荷」は当センターの推計。

#### ②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。  
中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」  
中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。  
原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

#### ③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

#### ④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

#### ⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。  
TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

#### ⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。